



赤シソ・日野菜・だいこん



土壌分析で土を「見える化」 適切な判断材料に

三重県四日市市 **西山文章**さん <赤シソ、日野菜、だいこん> 2018年

三重県鈴鹿市にほど近い西山漬物本店。特産の茶畑に隣接して、同社の工場と畑がある。西山文章さん(取材当時49)は同社の営業担当だが、「今は7割畑にいる」と苦笑いする。90年近い歴史を持つ同社だが、30年ほど前は中国産漬物に押され危機を迎えた。そんなとき国産にこだわる大手食品メーカーから、赤シソを大量に仕入れたいと要望された。従来使っていた品種では「香り」でOKが出ない。その取引先が提供する種を使い、栽培の指導を受けることで、やっと納品レベルの色も香りも良いシソができた。しかし品質が良い半面、従来品に比べ、収量は激減、病気も出るようになった。契約栽培農家のなかには断念し離れていく人もあり、その穴を埋める形で同社は自営で畑作を始めた。

■検査料安く 菌などポイント検査が可能

夏はシソ、冬は日野菜やだいこんで輪作するうち、シソでは青枯病、日野菜では根こぶ病の症状が現れた。何が原因なのか。土壌の化学性分析サービスはよくあるが、菌の病気を調べるには、専門の研究機関で行い高額な検査料が必要だ。

2017年、**アグロ カネショウから土壌分析の提案を受け実施。検査料が安く、菌の検査などポイントで調べられるところが決め手だった。**自社と7戸の契約栽培農家の畑で、深さと時期を変え48点の検体を分析。その結果、青枯病では、場所により40cmの深さまで菌がいることが分かった。日野菜では、根こぶ病が原因の畑とネコブセンチュウによる畑があった。この分析では、3段階で病原菌の密度が出る。**数値により、バスアミド微粒剤を深めに処理するなど適切な対策を取るための判断材料になる。土壌の見えないところが、「見える化」した効果は予想以上に大きかった。**

■土のバランスを整え 産地化を目指す

シソは契約栽培農家30戸と自社の畑を含め20ヘクタールで栽培、日野菜は同3ヘクタール栽培する。**「土壌消毒で病気を抑え収穫できるのが理想。しかし、それだけでは病害を抑えられなくなるときがある。土壌分析の結果を見て、土壌消毒で乗り切れるのか、畑を変えなければだめなのかが判断できる」と西山さんは評価する。**2018年は困っている畑で継続して検査を実施。研究熱心な西山さんは、土壌医資格にも積極的に挑戦中。「土のバランスを整え、産地化を目指したい」と漬物作りの傍ら高品質な作物作りにも余念がない。

**アグロ カネショウの
土壌分析**

農作物の生育に
大きな役割を持つ
土壌の健康診断を
実施しています。

